『ナムダアダ
ダヾダヾダヾイスト
ダガバジマクワウリ』
毛糸の帽子を顎の下までヒツパツて、編傘のやうにかぶつてゐるので、俺の顏は見えない。
『此んな芝居を見る奴もアホなら、する奴もアホだ』とか棄てゼリフを言つて俺は外へ出た。
さて汽車はまだ來ないか、俺は梅田まで又歩るかなければならない。
電車に乘るのは俺は、着物を着て湯に這入る程厭なのだ。
心齊橋通りの左側に刄物屋があつた。
俺は短刀を一振求めようかと思つたけれどもオーバシイので、西洋ナイフの鋭利な奴を求めた。
それを虎の毛のオーバーのポケットに藏はふとした。すると刑事が横脇から出て來てもぎとつて了つた。
仕方がない、船に乘らなければヨーロツパへはまだ行けないのだらう。
俺は大丸呉服店へ這入つた。そして三階へ駈け上つた。